

### V3.3, V3.4 個別動詞

#### V3.3 不規則にみえる動詞

「する」「来る」「死ぬ」「ある」の動詞を扱います。

#### V3.4 いくつかの動詞

「食べる」「触れる」「聞こえる」「見える」を扱います。

V3.3 不規則に見える動詞

「する」「来る」「死ぬ」「ある」の動詞を扱います。

する

自他共通原動詞です。

B8.4 ii) サ変動詞 参照

許容態を、-e-形式の時期には採用せず、-ur-形式の時期に連体形、已然形で「自他補強」(方式[3])の形で採用しました。動詞(語幹)は s-, si-, s;ur- の3つです。

表V3-37 「する」の推移表 「未然形」の欄も語幹の形で入れます。

原自他動詞		sy- (←推定形・奈良時代「す」)					
		未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
推定	前文献時1	sy-(azu)	sy-i	sy-u	sy-u	sy-e	sy-i=a
	前文献時2						sy-e
	前文献時3	s-(ezu)	s-i	s-u	s-u	s-e	s-e
	前文献時4			s;∅-u	s;ur-u	s;ur-e	
以下、文献記録時代							
3 語 幹	奈良時代	s-(ezu)	s-i	s;∅-u	s;ur-u	s;ur-e	s;e-yō
	平安時代						
	鎌倉時代			s(;ur)-u			
	室町時代	se-i					
	江戸・前期		s- / si-				
	江戸・後期						
現代	s- / si-	s-i	s(;ur)-u	s;ur-u	(なし)	si-ro	

サ行変格活用

表V3-38 動詞「する」(現代語)活用表(直接に付加する形態素の表) 本書p.42参照

活用区分	活用形	形態	使用例	語幹	
構造の形を変えない	k ①	基本(終止)形	s(;ur)-u	す(る)。	s(;ur)-
	k ②	命令形	si-ro	しろ。	si-
	k ③	意志・推量形	si-yoo	しよう。	si-
	k ④	中止形	s-i	し、	s-
	k ⑤	(仮定)条件形	s;ur-eba	すれば、	s;ur-
	k ⑥	他属性連続形	s-i	して	s-
	k ⑦	第1修飾形	s;ur-u	する人	s;ur-
	k ⑧	第2修飾形	s-i	しかた	s-
構造に付加	k ⑨	否定形	si-na.k-	しない	si-
	k ⑩	原因態形	s-as-	させる	s-
	k ⑪	受影態形	s-ar-	される	s-
	k ⑫	許容態形	(なし)	(なし)	

来る

B8.4 iii)カ変動詞 参照

許容態を、-e-形式の時期には採用せず、-ur-形式の時期に連体形、已然形で「自他補強」(方式[3])の形で採用しました。動詞(語幹)は k-, ko-, k;ur- の3つです。

表V3-39 「来る」の推移表 「未然形」の欄も語幹の形で入れます。

原自動詞		kw- (←推定形・奈良時代「く」)						
		未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	
推定	前文献時1	kw-(azu)	kw-i	kw-u	kw-u	kw-e	kw-i=a	
	前文献時2						kw-Ø=a	
	前文献時3	kö-(zu)	k-i	k-u	k-u	k-e	kö-Ø	
	前文献時4			k;Ø-u	k;ur-u	k;ur-e		
以下、文献記録時代								
3語幹	奈良時代	kö-(zu)	k-i	k;Ø-u	k;ur-u	k;ur-e	kö-Ø	力行変格活用
	平安時代	ko-(zu)					ko-Ø	
	鎌倉時代			k;ur-u			ko-yo	
	室町時代						ko-i	
	江戸・前期							
	江戸・後期							
	現代	ko-	k-i	k;ur-u	k;ur-u	(なし)	ko-i	

表V3-40 動詞「来る」(現代語)活用表(直接に付加する形態素の表) 本書p.42参照

活用区分	活用形	形態	使用例	語幹	
構造の形を変えない	k ①	基本(終止)形	k;ur-u	くる。	k;ur-
	k ②	命令形	ko-i	こい。	ko-
	k ③	意志・推量形	ko-yoo	こよう。	ko-
	k ④	中止形	k-i	き、	k-
	k ⑤	(仮定)条件形	k;ur-eba	くれば、	k;ur-
	k ⑥	他属性連続形	k-i	きて	k-
	k ⑦	第1修飾形	k;ur-u	くる人	k;ur-
	k ⑧	第2修飾形	k-i	きかた	k-
構造に付加	k ⑨	否定形	ko-na.k-	こない	ko-
	k ⑩	原因態形	ko-sas-	こさせる	ko-
	k ⑪	受影態形	ko-rar-	こられる	ko-
	k ⑫	許容態形	(ko-re-)	(これる)	ko-

問V3-42 「する」はなぜ変格活用なのですか。

問V3-43 「来る」はなぜ変格活用なのですか。

**死ぬ**

B8.4 i) ナ変動詞 参照

許容態を、-e- 形式の時期には採用せず、-ur- 形式の時期に連体形、已然形で「自他補強」(方式[3])の形で採用しました。しかし、江戸後期には不必要であることに気づいて放棄し、語幹は元の sin- だけに戻りました。

表V3-41 「死ぬ」の推移表 「未然形」の欄も語幹の形で入れます。

原自動詞		sin- (死ぬ)						
		未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	
推定	前文献時1	sin-(azu)	sin-i	sin-u	sin-u	sin-e	sin-i=a	
	前文献時2						sin-e	
	前文献時3							
	前文献時4			sin;∅-u	sin;ur-u	sin;ur-e		
以下、文献記録時代								
2語幹	奈良時代	sin-(azu)	sin-i	sin;∅-u	sin;ur-u	sin;ur-e	sin-e	ナ行変格活用
	平安時代							
	鎌倉時代			sin;ur-u/sin-u				
	室町時代			sin;ur-u				
	江戸・前期			sin;ur-u/sin-u	sin;ur-u/sin-u			
1語幹	江戸・後期							五段活用
	現代	sin-	sin-i	sin-u	sin-u	(なし)	sin-e	

表V3-42 動詞「死ぬ」(現代語)活用表(直接に付加する形態素の表) 本書p.42参照

活用区分	活用形	形態	使用例	語幹
構造の形を変えない	k ① 基本(終止)形	sin-u	死ぬ。	sin-
	k ② 命令形	sin-e	しね。	sin-
	k ③ 意志・推量形	sin-oo	しのう。	sin-
	k ④ 中止形	sin-i	しに、	sin-
	k ⑤ (仮定)条件形	sin-eba	しねば、	sin-
	k ⑥ 他属性連続形	sin-i	しにます	sin-
	k ⑦ 第1修飾形	sin-u	死ぬこと	sin-
	k ⑧ 第2修飾形	sin-i	しにかた	sin-
構造に付加	k ⑨ 否定形	sin-ana.k-	しなない	sin-
	k ⑩ 原因態形	sin-as-	しなす	sin-
	k ⑪ 受影態形	sin-ar-	しなれる	sin-
	k ⑫ 許容態形	sin-e-	しねる	sin-

問V3-44 「死ぬ」はなぜ古語で変格活用、現代語で正格活用(五段活用)なのですか。

ある

B8.4 iv)ラ変動詞 参照

ar- は態拡張しないで現代語になっているので、方式[1]の[Z1]動詞です。他の[Z1]動詞と異なるのは、古語の終止形が -u ではなく -i を取っていたことです。

表V3-43 「ある」の推移表 「未然形」の欄も語幹の形で入れます。

原自動詞		ar- (ある)						
		未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	
推 定	前文献時1	ar-(azu)	ar-i	ar-i	ar-u	ar-e	ar-i=a	
	前文献時2						ar-e	
	前文献時3							
	前文献時4							
以下、文献記録時代								
1 語 幹	奈良時代	ar-(azu)	ar-i	ar-i	ar-u	ar-e	ar-e	ラ行 変格 活用  五段 活用
	平安時代			ar-i				
	鎌倉時代			ar-i / ar-u				
	室町時代			ar-i / ar-u				
	江戸・前期			ar-u				
	江戸・後期			ar-u				
現代	ar-	ar-i	ar-u	ar-u	(なし)	ar-e		

表V3-44 動詞「ある」(現代語)活用表(直接に付加する形態素の表) 本書p.42参照

活用区分	活用形	形態	使用例	語幹	
構 造 の 形 を 変 え な い	k ①	基本(終止)形	ar-u	ある。	ar-
	k ②	命令形	ar-e	あれ。	ar-
	k ③	意志・推量形	ar-oo	あろう。	ar-
	k ④	中止形	ar-i	あり、	ar-
	k ⑤	条件形	ar-eba	あれば、	ar-
	k ⑥	他属性連続形	ar-i	あります	ar-
	k ⑦	第1修飾形	ar-u	あるお金	ar-
	k ⑧	第2修飾形	ar-i	ありかた	ar-
構 造 に 付 加	k ⑨	否定形	(ar-ana.k-)	(あらない)	ar-
	k ⑩	原因態形	ar-as-	あらせる	ar-
	k ⑪	受影態形	ar-ar-	あられる	ar-
	k ⑫	許容態形	(ar-e-)	(あれる)	ar-

問V3-45 「あり」は古語でなぜ変格活用なのですか。

問V3-46 「ある」の否定形「あらない」はなぜないのですか。

## V3.4 いくつかの動詞

「食べる」「触れる」「聞こえる」「見える」を扱います。

## 食べる

B9.12③ 参照

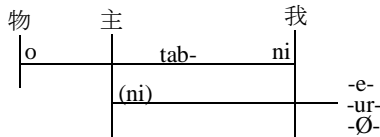
「食べる tabe-」は下図のように ni 格主体が主語になるので、[T12]の構造です。

まず「賜ふ tamah-」(目上の者が目下の者へ物を与える)という動詞がありました。これが音転して tamb-形を経て「賜ふ tab-」という動詞になりました。

tamaφ-u → tamφ-u → tamb-u → tab-u ( [ φ ] は /h/ の音声記号です。)

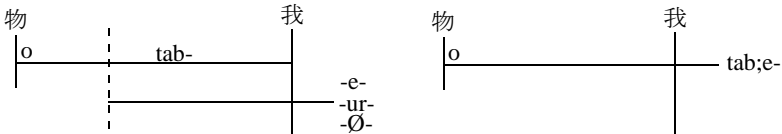
主(あるじ)の<sub>1</sub>我に物を賜ふ

この尊敬語「賜ふ tab-」が許容態-e- (-ur-, -Ø-)によって態拡張した結果、謙讓語である「賜べ tab;e-」(頂く)が生まれました。([T12]参照……下図のように「に格客体」の「我」が「許容主体」になっています。)



図V3-46 我の<sub>1</sub>主に物を賜べ(頂き) tab;e-

意味は、「上位者から頂く」から変化して「頂いて飲食する」となりました。さらに「上位者が与える」という視点が消失して、「飲む・食う」の丁寧語となりました。



図V3-47 我の<sub>1</sub>物を食べる → 我の<sub>1</sub>物を食べる(許容態が e に統一)

表V3-45 食べる

		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	
奈良時代							
3 語 幹	平安時代	tab;e-Ø	tab;Ø-u	tab;ur-u	tab;ur-e	tab;e-yo	下 二 段 活 用
	鎌倉時代						
2 語 幹	室町時代		tab;ur-u				
	江戸・前期						
1 語 幹	江戸・後期					tab;e-ro	下 一 活
	現代	tab;e-Ø	tab;e-ru	tab;e-ru	(なし)		

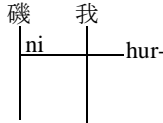
問V3-47 「食べる」は古語には「飲む」の意味もありました。なぜですか。

問V3-48 現代語では終止形は「食べる」ですが、古語ではどうですか。

触れる

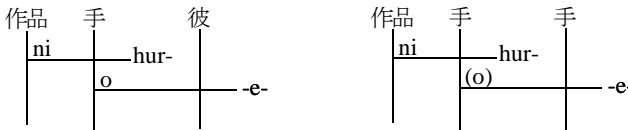
B9. 2①, B9. 6② 参照

「触る hur-」は、「磯に触り hur-i (海岸に沿って) (万葉集4328)」のように ni 格の客体を必要としていました。



図V3-48 我が磯に触る (我が海岸に沿う)

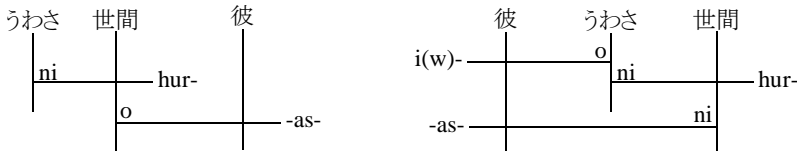
この動詞に「対他」の許容態が付いて態拡張すると「作品に手を触れる」(下左図)の hur;e- になります。「対自」の許容態が付く場合は「作品に手が触れる」(下右図)の hur;e- になります。



図V3-49 a 彼の1作品に手を触れる      b 作品に手が触れる

「言いふらす」の場合には、「i(w)-i=hur-as-」という形になっています。たとえば 彼が世間にうわさを言いふらす。ですが、この場合、「彼」は2つのことをしていることとなります。つまり、「うわさを言う」ことと、これによって、「世間がうわさに触れる」ようになることの原因者となること(下左図)、の2つです。

「うわさ」は hur- に対して ni 格ですから、hur- は自動詞とみなせません([Z6])。



図V3-50 a 世間をうわさに触らす      b(世間に)うわさを言いふらす [i(w)-i=hur-as-]

上右図では、原因態 -as- は「世間」に対して o 格ではなく ni 格になっています。これは「言う」という動詞が、先に o 格を使用したためです。(二重の o 格はありませんので。)……「彼は世間にうわさを言いふらす」の構造意味は、「彼は、うわさを言って、世間がうわさに触れるようにする」ということとなります。

問V3-49 「作品に手を／手が触れる」では、なぜ「を／が」両方が可能なのですか。

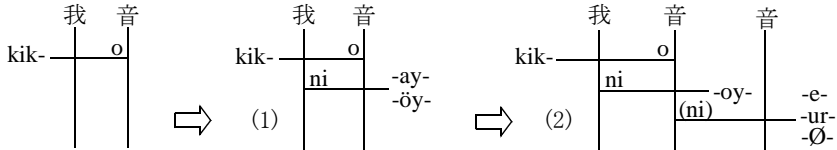
問V3-50 「言いふらす」の「ふらす」は、どういう意味ですか。

聞こえる・見える

B9.2⑤, B9.11④, B9.12③b) 参照

①「音が聞こえる」と、②「耳が聞こえる」というのは、どういう構造でしょうか。

まず、①「音が聞こえる」は、[T11](p.75)の構造でした。o 格にある客体が許容主体1となり、さらに、その同じ客体が対自の許容主体2になります。

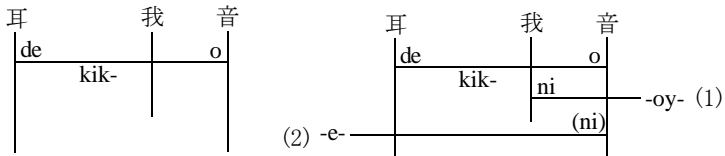


図V3-51 我<sub>0</sub>1音を kik- 我に音<sub>0</sub>1 kik;ay(öy)- 我に音<sub>0</sub>1 kik;oy;e(ur,Ø)-

「我が音が聞く」ことを o 格にある「音」が許容し(1), それを「音」がさらに(対自)許容する(2), という構造がここにあります。

では、②「耳が聞こえる」はどのような構造でしょうか。

まず、「我が音を耳で聞く」構造があります。これを「音」が許容する(1)ことは上と同じですが、異なるのは、許容主体2が「音」ではなく、de 格にある「耳」であることです(2)。「kik;oy-」を1動詞とすれば、「耳」が de 格にあるので、これは[Z12]に当たります。(「我」「音」は表層化されません。)

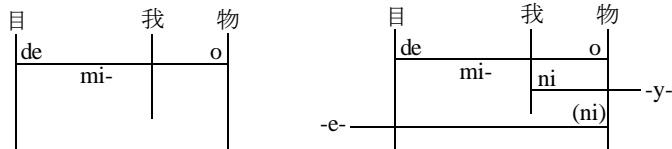


図V3-52 a 耳で音を聞く

b 耳が聞こえる (上中央図も参照)

「物が見える」と「目が見える」の場合も同じことです。

「物が見える」は上図の動詞を mi-にして、o 格にある「音」を「物」にすればよいのですが、動詞(語幹)末が母音のため、許容態は -y- と -e- です。「目が見える」の構造は下図のようになります。(「我」「物」は表層化されません。)



図V3-53 a 目で物を見る

b 目が見える

問V3-51 現代語では、「山が見える」と「目が見える」はどんな構造ですか。



## 林氏が見える=おいでになる

B9.2⑤, B9.11③④, B9.12③b) 参照

ここでの「見える」は現代語での(簡略化した) mi:e-ru の形で扱います。

## [尊敬]

次のような「見える mi:e-ru」は敬語で、「おいでになる」の意味になっています。

林氏が見える。(林氏がおいでになる。)



図V3-54 林氏が見える [尊敬]

この文は、「林氏」が会場などに来ることを表現しており、構造は、「林氏」が「私たちが林氏を見る」ことを許容する形になっています。

このときの「林氏」による「許容」は、「意志あり、制御可能」の事象とみなせますので、▲で表すことができます(S1.14)。

この「尊敬」のときは、「私たち」を表層化することはできません。

~~私たちが~~ 林氏が見える。

## [可能]

同じ文でも「可能」を意味することもあります。

林氏が見える。(林氏を見るのが可能である。)



図V3-55 林氏が見える [可能]

この文は、「私たち」が「林氏」の存在を目で確認できることを表現しています。(見ることが制御できるかどうかで、「通常可能」と「幸運可能」があります。S3.2t③)

構造としては、「林氏」は、「無意志、無制御」で許容する許容主体なので、▽で表すことができます(S1.14)。(S3.2や、p.55の[T2]も参照)

「可能」の場合には、「私たち」を表層化することができます。

私たちに(は) 林氏が見える。

## [自然生起]

見ようとしてもいないのに「林氏が見える」こともあります。「林氏を見よう」という意志がない場合、この事象は「自然生起」となります。(S3.2t②参照)

## コラムV5

## かな「語幹」が恥ずかしそう

「語幹」は「活用語で変化しない部分」のことで、「意味を担う部分」です。しかし、国語文法の「かな」で表記する語幹は、意味を担えないので、語幹で動詞を区別することができません。たとえば、語幹が「た」の動詞は少なくとも8つあります。

表V5-1 国語文法で「た」を語幹とする動詞

	動詞	かな表記	かな語幹	ローマ字表記	ローマ字語幹	
五段活用動詞	炊く	たく	た	tak-u	<b>tak-</b>	子音末動詞
	足す	たす	た	tas-u	<b>tas-</b>	
	立つ	たつ	た	tat-u	<b>tat-</b>	
一段活用動詞	絶える	たえる	た	tae-ru	<b>tae-</b>	母音末動詞
	建てる	たてる	た	tate-ru	<b>tate-</b>	
	貯める	ためる	た	tame-ru	<b>tame-</b>	
	足りる	たりる	た	tari-ru	<b>tari-</b>	
	食べる	たべる	た	tabe-ru	<b>tabe-</b>	

そんなばかな、と思う人も多いでしょう。でも活用表ではそうなっています。

表V5-2 国語文法の動詞活用表（上表8動詞のうちの4動詞を例とします。）

基本形	語幹	活用語尾					
		未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
炊く	た	か/こ	き/い	く	く	け	け
立つ	た	た/と	ち/っ	っ	っ	て	て
足りる	た	り	り	りる	りる	りれ	りろ
食べる	た	べ	べ	べる	べる	べれ	べろ

一方、ローマ字語幹なら、語幹が意味を担えるので、語幹で動詞が特定できます。

表V5-3 本文法の動詞活用表の関連部分（活用表全体は本書p.42参照）

動詞(基本形)	語幹(動詞)	未然形	連用形	終止形	連体形	条件形	命令形
炊く	<b>tak-</b>	-	tak-i	tak-u	tak-u	tak-eba	tak-e
立つ	<b>tat-</b>	-	tat-i	tat-u	tat-u	tat-eba	tat-e
足りる	<b>tari-</b>	-	tari-Ø	tari-ru	tari-ru	tari-reba	tari-ro
食べる	<b>tabe-</b>	-	tabe-Ø	tabe-ru	tabe-ru	tabe-reba	tabe-ro

国語文法では、動詞を音声表記にせず、かな表記にして、かなの不変部分が「語幹」であると勘違いしたままです。本当に情けないです。かな「語幹」が恥ずかしそうです。

問V3-52 国語文法の「かな語幹」、たとえば「か」で、動詞が特定できますか。

問V3-53 kas-, kat-, kari-, kare- などの語幹で動詞を特定できますか。

## コラムV6

## 未然形？ 仮定形？

①「のむ」と聞いたときに、意味が分からないという人はいないでしょう。②「のみ」でも、まあ、分かります。③「のめ」は、はっきり分かります。①は動詞「飲む」の終止形、連体形です。②は連用形、③は命令形です。

表V6-1 国語文法の動詞活用表

基本形	語幹	活用語尾					
		未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
飲む	の	④ ま／も	② み／ん	① む	① む	⑨ め	③ め

では、④「のま」「のも」と聞いて、これが何か未来のことを表していると思う人がいるでしょうか。国語文法では「のま」「のも」は未然形(まだそうになっていないことを表す形)といわれています。これを未然というのであれば、「のむ」「のめ」でさえ未然であるのではないですか。みんな未然形ということになってしまいます。

実は「のま」は、⑤「のまない」、⑥「のます」、⑦「のまれる」の頭の部分(下線部)で、「のも」は、⑧「のまう」の頭の部分です。本文法では下線部だけでなく、「」内全体が、⑤否定形、⑥原因形(使役形)、⑦受影形(受身形)、⑧意志・推量形です。

「未然形」というとき、上述のように、問題が2つあります。(1)「のま」「のも」という意味不明の形式に、(2)「未然形」という不適切な名称を与えていることです。

もうひとつ、同じ問題があります。⑨「のめ」といわれたときには、だれでも命令されていると理解します。これが仮定を表しているとは夢にも思いません。仮定を表すなら、「のめば」でしょう。しかし、「のめ」だけを「仮定形」とよんでいます。「仮定形」というなら、「のめば」ではありませんか。

国語文法ではひらがなを使って活用表を作りますので、かなの表す(〈子音+〉母音という)「拍」が単位となり、かなの配列の体裁が重視されます。つまり、動詞の活用表とはいっても、動詞の機能を整理することが目的にはなりません。

驚くべきことは、敢えて言いますが、国語学者のうちの言語学の素養のあるはずの人でさえこの国語文法の活用表に従ってきたことです。そして、日本人全体もこの活用表に疑いを持ちませんでした。日本人は集団錯誤の中にいたようです。……かなの呪縛は相当なものでした。

では、どのような活用表にすればよいのでしょうか。それは本書のp.42を見ればお分かりいただけるものと思います。

問V3-54 国語文法では、「飲む」の連用形の枠の中になぜ「ん」があるのですか。

問V3-55 五段活用動詞・連用形の枠内に2とおりの表示がない動詞は何ですか。

## コラムV7

## 原因基 -(s)as;e-

-(s)as;e- は、複合原因態として機能する原因基（国語文法の助動詞）です。動詞に付いて「直接他動・指示他動・結果将来・不阻止」の意味を与えます(S3.3参照)。歴史的には次表のように推移しました。

表V7-1 -(s)as;Ø- の変遷

		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
3形	奈良時代	-as;e-Ø	-as;Ø-u	-as;ur-u	-as;ur-e	-as;e-yö
	平安時代	-(s)as;e-Ø	-(s)as;Ø-u	-(s)as;ur-u	-(s)as;ur-e	-(s)as;e-yo
	鎌倉時代					
2形	室町時代		-(s)as;ur-u			
	江戸・前期					
1形	江戸・後期					-(s)as;e-ro
	現代	-(s)as;e-Ø	-(s)as;e-ru	-(s)as;e-ru		

上表で、平安時代に (s) が出現したことが分かります。このことは、動詞の態拡張によって、「育てる sodat;e-」や「下りる ori;i-」のように、eかiが動詞(語幹)末にくる、母音末動詞が出現したことを物語っています。

★ところで、江戸前期には、下表のように、許容態(;e-, ;ur-)の省略された形が出現しました。

表V7-2 -(s)as- の出現

許容態(;e-, ;ur-)の省略

		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
1形	江戸・前期					
	江戸・後期	-(s)as-i	-(s)as-u	-(s)as-u		
	現代					

使用例は以下のとおりです。

連用形 yom-as-i 読み(て) tabe-sas-i 食べ(さ)し(て)

終止形 yom-as-u 読みます。 tabe-sas-u 食べ(さ)す。

連体形 yom-as-u 読み(す)人 tabe-sas-u 食べ(さ)す(人)

これはどちらかという、非正規的な形として認識されています。やはり、許容態 ;e- の省略されない原因基 -(s)as;e- のほうが正規のものと感じられます。

連用形 yom-as;e-Ø 読ませ(て) tabe-sas;e-Ø 食べ(さ)せ(て)

終止形 yom-as;e-ru 読ませる。 tabe-sas;e-ru 食べ(さ)せる。

連体形 yom-as;e-ru 読ませる(人) tabe-sas;e-ru 食べ(さ)せる(人)

コラムV8

受影基 -(r)ar;e-

-(r)ar;e- は、複合受影態として機能する受影基（国語文法の助動詞）です。動詞に付いて「受影・自発・可能・尊敬」の意味を与えます(S3.4参照)。

表V8-1 -(r)ar;Ø- の変遷

		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
3形	奈良時代	-ar;e-Ø	-ar;Ø-u	-ar;ur-u	(-ar;ur-e)	
	平安時代	-(r)ar;e-Ø	-(r)ar;Ø-u	-(r)ar;ur-u	-(r)ar;ur-e	-(r)ar;e-yo
	鎌倉時代					
2形	室町時代		-(r)ar;ur-u			
	江戸・前期					
1形	江戸・後期					-(r)ar;e-ro
	現代	-(r)ar;e-Ø	-(r)ar;e-ru	-(r)ar;e-ru		

奈良時代は「尊敬」用法がなく、「受影、自発、可能」用法だけでした。

平安時代から室町時代までは、命令形は「尊敬」用法の場合のみに使われました。

平安時代に (r) が出現しました。このことは、動詞の態拡張により、「捨てる sut;e-」や「閉じる tod;i-」のように、e か i が動詞(語幹)末にくる母音末動詞が出現したことを物語っています。

捨てられる sut;e-rar;e-ru

閉じられる tod;i-rar;e-ru

★奈良時代には -ay;Ø- という受身・自発・可能の形式がありました。「ゆ」です。

表V8-2 奈良時代の -ay;Ø-

		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
3形	奈良時代	-ay;ë-Ø	-ay;Ø-u	-ay;ur-u	-ay;ur-e	

・これが語幹化した動詞については形式[11](本書pp.74-75)を参照。

[受身] 「人にいとほ<sub>え</sub> itoh-ay;ë-Ø」 〈人にいやがられ〉

[自発] 「音のみしな<sub>ゆ</sub> nak-ay;Ø-u」 〈声をたてて泣いてしまう〉

[可能] 「わすらえぬ wasur-ay;ë-nu かも」 〈忘れることはできないことよ〉

問V3-56 現代語の「取られる」は、奈良時代、室町時代にはどう言いましたか。

問V3-57 学校で助動詞「れる・られる」と習いますが、これは別のものですか。

問V3-58 国語文法では -ay;Ø-u のことをなぜ「ゆ」というのでしょうか。

## コラムV9

## 古い原因基 しむ -(a)sim;Ø-

古語には「取らしむ tor-asim;Ø-u」「得しむ e-sim;Ø-u」のように「しむ -(a)sim;Ø-」という態形式(基)がありました。「さす -(s)as-」と同様、原因態を表示するもので、主として使役を表しました。

この「しむ -(a)sim;Ø-」の歴史的推移は下表のとおりです。

表コV9 -(a)sim;Ø- の推移

		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
3 形	奈良時代	-(a)sim;ë-Ø	-(a)sim;Ø-u	-(a)sim;ur-u	( -(a)sim;ur-e )	-(a)sim;ë-Ø
	平安時代	-(a)sim;e-Ø			-(a)sim;ur-e	-(a)sim;e-yo
2 形	鎌倉時代		-(a)sim;ur-u			
	室町時代					
	江戸・前期					
	江戸・後期					
	現代	-(a)sim;e-Ø	-(a)sim;e-ru	-(a)sim;e-ru		-(a)sim;e-yo

※上表のように、奈良時代には許容態に3つの形式がありました。

連用形、命令形では ;ë- で、 (tor-asim;ë-Ø 取らしめ)  
 終止形では ;Ø- で、 (tor-asim;Ø-u 取らしむ)  
 連体形、已然形では ;ur- でした。 (tor-asim;ur-u 取らしむる)  
 (tor-asim;ur-e 取らしむれ)

※はじめは、許容態詞が付かず、原因態詞のみの -(a)sim- であったと考えられます。(奈良時代よりかなり前です。)

※ -(a)sim- は、研究が進めば、-as-im- のように分析できるようになる可能性もあります。

この原因態形式(基)は、平安時代には主として漢文訓読系の文献に用いられ、室町時代よりあとは文章語としてのみ使用され、特に近世以降は会話ではまったく用いられなくなりました。同じ機能を持つ、より短い許容態詞 -(s)as- があったので、必要がなくなったものと考えられます。

上の表の〔現代〕の部分に白抜き文字で示したのは、現代において擬古文的に使われた場合の形です。

問V3-59 動詞「いましめる」の中に -(a)sim;Ø- はありますか。

問V3-60 「くるしめる」は「いましめる」の構造と同じですか。